

「医療」のあり方への一意見

国立国際医療センター

工藤 宏一郎

本学会誌「医療」の今後のあり方をめぐって編集委員会等で討議されていると聞いています。小生は編集委員の一員であるにもかかわらず、その機会の編集会議を欠席していたのでこの場を借りて誌上参加させていただければと願い、思いつくままを記すことをお許しください。

「医療」のあり方の論議がなされているのは時節に相応していると思われる。つまり、平成16年4月を期して旧国立病院系施設の多くは新しい目標と理念をにかけて国立病院機構として出発したからです。「医療」を発刊している国立医療学会の主たる母体が新しい組織として出発するからには、その主旨に沿って学術誌のあり方が再検討されるのは当然であろうと思います。

国立病院機構の目指すものとして、矢崎義雄機構理事長が「医療の広場」(第44巻4号)に記されています。文章の一部をしばらく勝手ながら引用することをお許しただきたいと思います。「そもそも国立病院機構の目指すものは、医療の原点に立ち帰り、まず患者の目線に立ち、国民に満足される安心で質の高い医療を提供することである。その上で国の政策医療を各病院の機能と特色を活かして推進する、政策医療としては国民の健康を守る視点から、結核をはじめとする感染症や民間でアプローチが困難な難病や重症心身障害等への取り組み(中略)一方、国立病院がひとつのネットワークを構成して臨床研究を進め、診療の科学的根拠となるデータを集積するとともに、その情報を発信し(中略)病院に設置された臨床研究センターおよび臨床研究部を活用して、わが国で最も弱点とされた医療のエビデンスの創生と(中略)人材育成も大きな課題である。(中略)国立病院の医療をリードする医療人の育成が肝要である。」と、理事長はその文章の中で、国立病院機構の今後の目指すことを、実に簡明にかつ余すことなく述べられており、「医療」の今後の在り方を検討する際、大変参考になるのではないかと思います。

一般に医学会誌の目的とするところは、その学会の学術的活動の紹介、端的に言えば研究、症例報告、あるいは学術的な総説などに限られています。しかし国立病院機構の目指すところは、先述したように医学分野が専門化、あるいは特定化されている他の医学会とは明らかに異なり、いわば総合的な医療そのものであり、かつ国民

の為の医療という原点を目指しています。従って「医療」は他の医学会誌の概念には収まらず、逆にその収まらないのが特長であると言えます。母体の目指すところを堂々と追求するのが本筋ではないでしょうか。

そのような視点に立って編集を行えば、「医療」はユニークで、医療関係者のみならず広く患者や国民に対しても一層魅力あるものになるのではないのでしょうか(今までそうでなかったとっているのではありません)。以上のような観点から具体的な提案を行いたいと思います。

1. 「医療」の編集方針を、新組織の目指す内容に沿って新しくすることを宣言する。新機構の発足と同様に「医療」のイメージチェンジをはかる。

2. 内容をいわゆる他の学会誌のように学術的内容だけでなく、多くの職種の方にも関心を持たれるようテーマを取り上げ、領域を広くすること。個々の内容をうすめるというのではなく、分野を広くすること。

3. 教育的、啓蒙的な内容も充分に取り入れること。これは最近の「医療」には特集や図示、セミナー等が多く編集されており、好評とお聞きしていますが、さらに推進した方がよいと思います。時には学会外の方にも依頼する。

4. HOSPnet と連携し、国立病院機構職員に有益な論文内容などは従来の活字文化(専門家集団内の学会誌)を越えて、広く知ってもらおうようにする。また患者あるいは一般国民にも知ってもらいたい内容を編集し直して、インターネット上にホームページを開設して広報する。言ってみれば学会誌の内容で機構と国民のPRをはかる。

5. 学会誌の財政基盤を強化する為にも、機構のスタッフで一定以上の役職の方には定期購入者になってもらう。また広告を掲載し広告料を編集事務局機能強化に資する。

6. 財政的基盤を強化すると同時に編集事務局機能を強化する。そして、例えば編集局記者を置いて、積極的に各施設に向いて取材し、施設の活動、機能、特色をホームページ等で地域住民あるいは全国的に広報する。

思いつくままを記しましたが、要は一般的な学会誌の概念にとらわれず、掲載する内容を広く、読者を広げ、患者、国民と e-mail を利用した PR を確立すること、財政的基盤・編集事務局機能を強化することにあるかと思えます。提言の中には事実誤認や実現不可能なことがあるかもしれませんが、参考としてとっていただければ幸いです。